

尼子氏興亡・毛利氏勃興をめぐる領域的支配と地域

―出雲西部・石見地域を中心に―

佐伯 徳哉

本論では、尼子氏の興亡期・毛利氏の勃興期における出雲西部・石見中東部地域の領有関係の変化と地域における経済活動の展開を、大名権力や領主権力の領域支配と地域の枠組みとの緊張関係から考えることを目的にする。その際、東アジアの広範な地域における経済的な動きに、出雲西部・石見地域がどう構造的に影響され、権力の興亡につながったのかについても考えていきたい。

尼子氏の本質的性格を考える際、戦国期大名権力の特徴のひとつでもあるが、その本国支配の他に、近隣諸国から中国地方全体にわたる広範な外征を伴うところに留意する必要がある。尼子氏は、西隣の周防大内氏や南の安芸毛利氏と衝突をくりかえし、毛利氏の勃興と膨張によって衰亡していく。その相剋の直接的な場となったのが、石見中東部から出雲西部にかけての地域である。

長谷川氏は、尼子氏の外征を経久段階の畿内方面への遠征段階と、晴久の安芸郡山での敗戦以降の近国への外征段階とに分けた(1)。その中で尼子権力後半期の晴久段階については、無理な遠征を慎んで地盤を固め、西日本海沿岸部の港湾や石見銀山の確保、それによって実現される東アジア海域との関わりに活路を見いだそうとした可能性が高いとした。そこで、これをうけて、晴久段階において、尼子氏が、石見銀山とその周辺確保によって東アジア海域との関わりを確保しようとしたのかどうかをまずは詳細に吟味してみたい。これは尼子

氏権力の最盛期から衰退・滅亡に至る同権力後半期の領国支配の志向性や方法に関わる問題として重要である。次にこれと関連して、毛利氏が安芸の国人領主から戦国大名として成長し、さらに中国地方の広域大名権力となっていく過程において、同氏が領国経営においてどのようなビジョンを描いたのかを考えたい。とりわけ、毛利氏の場合、安芸の国人領主段階当初から東アジアとの関係を意識していたかどうか、その成長段階に即して吟味の必要がある。また、西国最大の大内領国と、これを継承する毛利氏や、その東に位置する尼子領国が東アジアとの関係において同じ政治的志向性を示していたのかどうかについても検証の余地がある。

従って、ここでは尼子氏衰退過程・毛利氏の勃興過程において、彼らが地域を支配する権力として、地域とどのように向かい合ったのかを焦点に据えられなければならない。換言すれば、地域を即時的に東アジアの大きな枠組みに持ち込む前に、彼らが支配しようとした地域の内部構造に即して分析を加える必要がある。尼子氏が大内氏滅亡後に押さえ毛利氏が石見平定にあたっていち早く進出を遂げようとした石見中東部の経済構造や、尼子本国出雲西部と石見中東部地域の領域的関係を、内陸奥深くから沿岸に至る平面構造的視点から分析し、それらが東アジアとの関係を担う東西水上交通とどのように接点を持ち、規定されるものであったかを見極めていく作業が必要である(2)。

## 第一章 領域支配と隔地間商人・地域商人

### 第一節 銀山発見期の銀山地域支配と隔地間商人神屋氏

『石見国銀山旧記』によれば、一五二六年、博多商人神屋寿禎が、出雲国鷺浦へ銅商いに行く途中に、石見銀山を発見したという。神屋氏が大内氏の遣明船派遣とも深く関わる商人であることは『策彦入明記』などの記載でも知られるところである(3)。

『策彦入明記』・『銀山旧記』の記事や当時の博多の領有からも、神屋氏は周防・長門・豊前・筑前と石見を分国支配する大内氏と関係が深い豪商であったと考えられている。また、石見東部の邇摩郡は、室町時代、石見国が山名氏の分国であった時代においても、一貫して大内氏の分郡であったとされている(4)。石見国は、永正十四(一五一七)年には、すでに室町幕府より大内義興の守護国とされている(永正十四(一五一七)八月十一日室町幕府奉行人連署奉書(『益田家文書』二七五)(5)。

しかし、大永三年八月六日大内義興感状(阿川家文書『武州古文書』)には「去七月廿三日、於石州賀戸塩田浜、親父掃部允総康討死、無是非次第也、於高名忠節者、令感悦畢、弥可抽勲功之状、如件」とあり、一五二三年七月には石見国加戸・塩田(江津市渡津町)付近で、尼子方と大内方が合戦に及んでおり、すでに、尼子氏が石見東部の安濃郡・邇摩郡の沿岸部よりさらに西の那賀郡沿岸へと進出しつつあったことがわかる。このことは次の尼子経久寄進状(日御碕神社文書)(6)からもよくわかる。

石州那賀郡之中波志浦之事、先規雖為御崎領之由候、数ヶ年御不知行候、今度此表不慮切取之、為特寄進立置申候、弥可被抽精誠之者也、恐々謹言、

大永参

八月十四日

御崎又五郎 殿(小野宗政)

経久(花押)

とあり、また、同日づけの御崎殿あて亀井能登守秀綱書状(日御碕神社文書)でも「宇津波志之浦之事、御本領之由候間、為新寄新(マコ被返進之候)として、日御碕社に対して石見国那賀郡波志浦(江津市波子町)を寄進している。その理由は、元来、日御碕社本領であった同浦がここ数年不知行に陥っていたが、尼子氏がこの地を切り取ったので同社に寄進するという。ここに、尼子氏の軍事的行動がさらに西に向かったことがわかる。

そして、大永四(一五二四)年卯月十九日づけ日下に尼子氏奉行人で造宮奉行の亀井能登守(秀綱)の名が見える日御碕社修造勸進簿には、「雲州日御碕遷宮修造化縁簿」として元室町幕府十代将軍足利義植と佐々木伊予守(尼子経久)の袖判が据えられている(7)。

「日御碕付テ御造宮、任先例公方様御下知、御判在」として勸進の範囲を「雲州一国棟別之事」「伯州 汗入郡・日野郡・相見郡」「石州 尼摩郡(邇摩)・安濃郡・大知郡(邑智)」「隠州一国棟別之事」とあり、いずれも「無所 免除申付候」又は「棟別之事、無所 免除申付候」などとしており、棟別を免除してその分を勸進に充当しようとしたものとみられる。ここには、この時点で尼子氏が公方として正統と認める元将軍義植の「公方様下知」によって、尼子氏がこれら国郡支配の正統性を主張しようとする意図が見られる。その中に石見東部三郡(邇摩・安濃・邑智)が含まれている。

この勸進簿に記された範囲は、この時期、尼子氏が軍事行動を展開した範囲にあたり、領国支配を主張した範囲と考えられる。大永五（一五二五）年十一月十日の小笠原長徳感状（庵原家文書）（8）には「今度伯州淀要害落去」とあり、当時の尼子氏の東部戦線が伯耆国汗入郡付近であったこと。当時、尼子方として活動していた小笠原氏は石見国邑智郡河本郷（現在の川本）を本拠とする国人であったことなどから、尼子氏の東西勢力範囲と勸進状の東・西限が概ね符合していることがわかる。

これらのことから、大永五年頃の石見東部三郡は、大内氏の守護国であるにも関わらず、邑智郡川本の小笠原氏を配下に組み込んだ尼子氏によって、実質的に領国支配されていたと考えられる。

石見銀山が発見されたという大永六（一五二六）年頃は、このように西は石見東部から東は西伯耆三郡へと、尼子経久の軍事的進出の時期にあたっていた。博多商人神屋寿貞が尼子領国内の出雲国鷺浦（佐木）へ銅商いに往来していたというこの時期、寿貞が銀山を目指して上陸した温泉津を含め石見東部一帯は、大内氏の守護国の範囲にはありながらも、実質的には尼子氏の領国支配下にあったとみたほうがよかる。寿貞とともに石見銀山へ入山した鷺浦の三島清右衛門が出雲国田儀出身の山師であり地元商人であったことも、そのような事情と関係があると考えられる。また、神屋氏も、三島氏のような地元商人との結びつきによって隔地間商人としてその役割を果たしたといえる。

その中であって、博多商人神屋寿貞は、筑前博多から出雲まで、大内・尼子間の政治的軍事的修羅場となった境界を超えて交易活動しつ

つ、石見東部邇摩郡の銀山を発見開発したのである。神屋氏は、東アジア交易をも担ったことと併せて、そのような意味において、隔地間商人であったわけである。

## 第二節 大内義隆自刃後の銀山支配と地域商人

天文二十（一五五二）年、石見守護職でもあった大内義隆は、家臣の陶隆房の謀反により自刃する。

天文二十一（一五五二）年十二月六日尼子晴久袖判奉行入連署書状写（尼子家古記録、島根県立図書館）では、尼子氏奉行人から坪内宗五郎にたいし「石州佐間銀山にて、屋職五十貫可被遣之由候」と見え、石見銀山において貫高設定された屋敷が給与されると伝えている。坪内氏は、杵築大社門前の杵築を拠点にした商人であり、壇所（御師宿）を営むとともに、尼子氏と被官関係を結んで軍役衆として立ち働くなど多様な性格を持った（9）。

この直前に坪内氏に対して出されたと考えられるのが次の尼子晴久書状である（『坪内家文書』）。

坪内備州細々使仕候、神妙之至候、彼表於任本意者、林木・朝山以両所之内壺名可遣候、若両所之内出入共候て、相支儀候者、何にても候へ於原手公領分内壺名可遣候、石州銀山屋敷之事、書立之旨五ヶ所不可有違儀候、弥忠儀肝要之由可被申候、恐々謹言、

（天文二十一年） 十月十日

晴久（花押）

（捺封ウハ書）

「（墨引）受楽寺

仁賀左衛門尉まいる

晴久」

これは、岸田氏も述べるように、尼子晴久が、坪内氏に対し複数の所領の給与を約した中で銀山にも五ヶ所の屋敷の給与を約したものである(10)。おそらく先の五十貫の屋敷を指すと思われる、十月から十二月までの間に貫高が付されたものと考えられる。ただし文面からは、書立の記述にある(既存の)五ヶ所の屋敷の所有を改めて認めるという印象が強い。

これらの文書は、いまだ大友晴英が大内氏に入っていない時期のものである。天文二十一年頃には、石見銀山は、大内義隆の後、陶隆房が支配を引き継いでおり、尼子氏が支配していた徴証はない(11)。

天文二十一年頃の図師木工允あて山根常安書状(『真継文書』)には「任 綸旨之旨、如先々鑄物師公役事、可相調之由、從 陶殿対長雄被成御一通候、可致其調之由、堅固被申付候、存其旨候、仍於所々市・町・見世棚之儀、以先例可申付之由、申渡候処、各同心被申候、然処銀山大工所へ両度申渡候へ共、無同心候、彼大工在山口幸之儀候条、從 尾州様急度被成御下知候様、可有御注進候」とあり、石見銀山が山口の陶氏の下、大内領国支配下にあったことがわかる。この文書からは、綸旨によって蔵人所から石見国の鑄物師らに課された公役の徴収を、山口の陶隆房が、川本の国人領主小笠原長雄に対して一通をもって指示したこと。これをうけて、長雄の被官であった鑄物師頭領の山根常安が、先例のとおり石見国内の市・町・見世棚に徴収をかけたところ各同心してくれたこと。しかし、銀山の木工のみ同心しなかったので、この木工が山口にいるのを幸いに陶隆房から直接命じてもらうように注進するのがよいとしていることなどである。

これは、大内氏の守護権に依拠した公役賦課であると考えられる。公役の徴収は、各郷の木工職の同心を前提としたとみられるが(12)、市・町などの流通の結節点において行われ、これが先例となっていることがわかる。

これは、陶氏が専ら下知の主体となっており、陶氏の謀反以後で大友晴英(のちの大内義長) 入部以前の状況と考えられるが、邑智郡川本の小笠原氏も大内領国(守護国)の枠組みに組み込まれて陶氏に従っており、尼子氏の支配あるいは軍勢力が石見銀山に入りこむ余地がほとんどない政治状況である。

天文二十二(一五五三)年卯月五日づけの大内義長袖判安堵状(『萩閥』六六刺賀佐左衛門一)には「石見国安濃郡刺賀郷五百貫地、同国邇摩郡内重富村肆拾貫地等事、先証於山吹城令焼失云々、任当知行之旨、刺賀治部少輔長信可領掌之状如件」とあり、当時、刺賀氏が知行していた安濃郡刺賀五百貫と邇摩郡重富村四十貫の地が、権利証書類が銀山山吹城の焼失により失われたため、大内氏の新当主義長により安堵されている。焼失の事情は不明ながら、安濃郡沿岸部刺賀郷(久手・鳥居付近)の領主でもあった刺賀氏が銀山山吹城に入って、大内氏のために銀山の守備にあたったことがわかる。

以上と、先の坪内氏への屋敷地安堵からは、すでに大内領国下の石見銀山において坪内氏が商業活動を展開していた可能性を読み取ることができる(13)。

また、晴久による屋敷地安堵からは、坪内氏が大名支配の政治的領域を超えた一見自由な活動を行いなながらも、やはり被官関係を結んだ大名の支配からは必ずしも自由ではないことがわかる。ここに、彼ら

地域有力商人らの商業経営上の利益と、政治的支配関係との間に矛盾・齟齬が生じる可能性を胚胎していることを読み取ることができるのである。

## 第二章 毛利氏の勃興と石見地域

### 第一節 石見人間対立と元就の和平調停の政治史的意味

しかし、この直後、江の川沿岸とそれ以東の石見銀山周辺地域をめぐる政治状況は急速に混乱してくる。

天文二十二（一五五三）年十二月、江の川沿岸地域に位置する邑智郡日和村において、那賀郡福屋郷の国人福屋氏と邑智郡川本郷の小笠原氏が軍事衝突を起こす。また、ほぼ同時期に江の川下流部東岸の井田付近を境に、福屋氏と、大内方の邇摩郡代問田衆や小笠原氏とが対峙するに至っている。同年のものと考えられる、吉川元春あて年月日未詳毛利元就書状（『萩閥』遺漏五一―松岡家一）には「福屋・小笠原之事、近日者節々取相之由候、就其河本へハ三吉・江良是許申合、使者遣候間可異見候、福屋へハ從御方急度々々可被仰遣へく候」とみえ、最近になって福屋と小笠原が衝突するようになったため、川本の小笠原氏へは江の川上流の備後国人三吉氏らが元就と申し合わせて和平の説得工作を行っているので、福屋氏へは吉川元春の方より同じく説得工作を行うよう元就が指示している。また、「一、福屋之儀を者雲州へ申談候事必定にて候なとと問田衆なとなくミ候て聞へす、井田之城も問田衆・小笠原（原脱カ）同前二居候、ひかれ候へと此間從江良所両度申遣候へとも、防州へ注進候ハんとて于今不引候」とあり、ことは福屋対小笠原間の問題ではなく、この地域を超えて尼子氏・大

内氏という領国大名間問題へと発展する可能性を含んでいた。つまり、小笠原氏に与した大内氏方の問田衆らは防州Ⅱ大内氏（陶氏）へ注進しようとし、これに対する福屋氏は尼子氏との結びつきが疑われているのである。このようにして、安芸国高田郡にあった毛利元就が中心となつて、小笠原・福屋両氏らと同じ江の川水系にあった安芸・備後の有力国人らを動員して和平工作に腐心するが、はかばかしい方向には向かわなかった。

この時期の危機的状況を記したとみられる年月日未詳毛利元就自筆覚書（『吉川家文書』）では「是非共河上半分被出、福・小笠何とそ縁辺などに被申合、福・小笠無二被申談候へハ、可被及大事事、さ候而、福・小笠・吉川無二申談候へハ長久可然事」と記しており、元就の強い危機感が表明されている。江の川河口部に位置する河上郷（現在の江津市松川町付近）の折半をもって両者からぎりぎりの譲歩をひねり出そうとする内容からは、前稿でも触れたように、大内領国の政治的な変動の中で、江の川河口部の河上郷の支配を通じて、江の川水系山間部から沿岸部への出口確保を強く志向した福屋・小笠原ら石見山間部領主の政治的運動があったことを窺わせている（14）。このように、江の川下流域に起きた石見の二大国人領主間の軍事対立は、江の川水系全体を巻き込んだ地域問題へと発展し、これに東西の大大名らが介入しそうな危機的様相を呈してきている。このことが元就の強い危機感の背景にあつたものと推測されるのである。

### 第二節 毛利氏の石見進出と尼子氏―石見中・東部情勢から―

しかし、この和平工作は失敗したものとみられ、結局、調停を断念

した毛利氏は吉川氏を先鋒に、石見の切り取りへと動いていくのである。

天文二十四(一五五五)年霜月二十一日づけ吉川元春自筆書状案(吉川家文書』一一四五六)では、福屋氏にあてて「如仰去年以来防雲江被成御手切、被対毛・吉江無二御入魂之至」としており、福屋氏は、既に天文二十三年には出雲尼子氏と周防の大内氏と手を切り毛利氏と結ぶに至っている。これに対して毛利・吉川氏らは、福屋氏に対し同領の西側に位置する石見国那賀郡永安・木束・井村の支配を認め、毛利・吉川氏らも天文二十三(一五五四)年五月に、毛利氏は陶氏と手を切っているので、これら一連の動きは連動しているとみられる。少なくとも福屋氏は天文年間に入ってから、那賀郡の山間部福屋郷から沿岸部の要衝小石見郷浜田の港湾部に向けて進出してこれを支配し、大内義隆滅亡以後は、さらに江の川河口部から邇摩郡方面に向けて進出を試みていた。福屋氏は、石見中央部にあって江の川河口部の西側沿岸部の要衝から安芸吉川領境に至る山間部にかけての広範な領域支配を展開していた(15)。毛利氏がこの福屋氏と提携することは、石見東部・同西部進出にとって重要な一歩である。

これにほぼ時を同じくした天文二十三年十一月、尼子氏内部では新宮党討滅事件が勃発している(16)。この混乱によって、尼子氏としては毛利氏の石見切り取りの動きに対抗するのが困難であったにちがいない。討滅事件直後の翌天文二十四年二月を中心に六月頃にかけて、尼子晴久は、出雲西部の主立った神社ほかに所領寄進・安堵などを集中的に行っている(17)。これは、それまで新宮国久が支配した出雲西部地域への尼子晴久による政治的手当であったとみられる。

この動きから、新宮党討滅後の出雲西部地域のとりあえずの政治的手当を経て、福屋氏と敵対する邑智郡川本の小笠原氏が、尼子氏に接近していった蓋然性が高い。おそらく天文二十四年十月、陶晴賢が嚴島で敗れたことを契機に、この動きは決定的なものになったと考えられる。

(弘治二(一五五六)年カ)三月十日尼子晴久感状(石見小笠原文書)では尼子晴久から小笠原弾正少弼あて「先日、竹表御動之時、御親類大蔵丞殿首一討取候」とみえ、川本の西方の江の川沿岸の竹において尼子方の小笠原氏と毛利方(福屋勢)との間で合戦があったことがわかる。ほぼ同時期のものとみられる(弘治二年)三月二十日毛利元就書状(熊谷家文書一三二)には、元就から熊谷信直あて「一、石州表之事、乱にて何とも笑止千万候、如仰元春・隆家、一昨日被出候、都賀・用路計にてハ佐波へ伝難成候条、山南一城取付、佐波へ伝ニ仕度由候」とみえる。毛利氏は、出雲国境付近にある邑智郡佐波郷の佐波氏とよしみを結んでいた。しかし、江の川を挟んだ要衝で出雲赤穴庄へとつながる重要な渡河点でもあった都賀郷と都賀西の用路城(要路城)をおさえるだけでは佐波への連絡路としては不足で、江の川西側の山南(邑智郡比敷・村之郷・宮内付近)に城が必要だと吉川元春・宍戸隆家らが述べている。これは、出雲の尼子氏と川本の小笠原氏との赤穴・都賀経由の連絡路を断とうとする意図もあったとみられるが、安芸・備後方面から石見東部への通路として江の川ルートの確保がいかに重要な意味を持っていたかを窺わせている。

従って、毛利氏にとっては、陶晴賢と手を切り、石見切り取りのため石見中央部の福屋氏と結びつくことによって、陶方にあった小笠原

氏を尼子方に走らせてしまったという代償は決して小さくなかったのである。ただ、少なくとも、毛利氏にとつては出雲国境邑智郡における石見佐波氏の確保は、小笠原領以南の石見東部と備後など江の川水系上流域と尼子氏の軍事的圧力とを分断する要件であった。

### 第三節 小笠原氏の降伏と尼子氏の石見撤退

これ以後、しばらくは銀山周辺で尼子・毛利方の戦鬪が一進一退であった。弘治二（一五五六）年八月頃には、「銀山尼子陣之事、此方為後卷罷出候事、其間候而、浮立候、然砌、佐波ニ置候此方人数、佐波衆申談、中途之山へ打上、成行候処、則時退散候、山吹衆敵数輩討捕由候、左候間、三久須・矢筈・三ツ子已下敵城、悉退散之由候、昨日佐波衆此方之衆、至池田相動、則時切取候、其俣大田江相動之由候、定而大田之事茂可事行候歟（中略）小笠原之儀者、急度仕詰候者」（年未詳八月九日毛利元就書状（『萩閥』11浦家2）

とみえ、銀山周囲の三久須城・矢筈城・三ツ子城などに陣取っていた尼子勢を、佐波氏と佐波へ置いていた毛利勢らが退散させ、その際、毛利方の銀山山吹城衆が敵尼子勢を討ち取ったとする。そのうえで、彼らは佐波領至近にあった三瓶山麓の池田を切り取り、さらに大田方面へ進出しつつあるとする。このような佐波衆の目覚ましい働きからであろうか、同八月二十六日には、元就から佐波興連・同隆秀に対して、「弓箭中之儀進之置候」として都賀半分が宛行われ用路在城が命じられている（弘治二年八月二十六日毛利元就書状写『萩閥』71・佐波庄三郎）。

一方、江の川河口部に目を転じると、弘治二年九月には、それまで

小笠原領であった都治が福屋氏の支配に入っている（弘治二年菊月十一日福屋越中守兼清安堵状『武明八幡宮文書』（18）。弘治三（一五五七）年三月には福屋・吉川両氏は江の川中流西側の井原対小笠原の相城を普請、同四月下旬には小笠原の旗山城を攻撃し小笠原氏の勢力下にあった江の川中流地域への軍事的進出を試みている（弘治三年四月二十七日小笠原長雄感状『平田家文書』（19）、（弘治三年三月二十三日毛利元就書状『萩閥』八四―九、児玉弥七郎、（弘治三年）三月二十六日毛利元就書状『萩閥』八四―一〇、児玉弥七郎）。以後も、毛利氏は、石見東部進出のため、川本の小笠原氏の圧伏に全力を注ぐ。

永祿二（一五五九）年七月、尼子氏は、小笠原氏救援のため、毛利方の福屋勢が守る河上（川上）松山城を攻撃して失敗する。（永祿二年）七月二十六日杉原盛重書状（横山文書）（20）では「雲州衆福屋端城河上へ相動候間、元春・熊谷同前に為後卷打廻候処、不待付、ゆの津迄引退候、彼表ニ于今雖逗留候、手負死人依有数多、重而之行、不及了簡由其沙汰候、小笠原之儀茂、一姿可有候間」とみえる。河上松山城は江の川河口近くの大川の屈曲点にある要害である（21）。小笠原氏は、同年六月以来、毛利勢によって包囲され本城である川本の温湯城において籠城戦を強いられていた。しかし、この尼子氏の失敗直後の同年八月に小笠原氏は三ヶ月近くの籠城の末、温湯城を開城し、毛利氏に降伏してしまう。ここに、尼子氏は石見東部三郡のうち沿岸部を除いて足がかりを大きく失ってしまう。

河上（川上）松山城攻めで敗北した晴久は、退却して永祿二年七月二十八日頃には温湯津に在陣、さらに撤退して九月末から十月にかけて

て大田に在陣し、結局、十月二十四日に出雲へ帰陣し神魂社(意宇郡)などに参拝するなど、石見東部沿岸から出雲へ帰陣している(年月日未詳、神魂伊弉諾両社先礼覚書断簡『秋上家文書』)(22)。

尼子氏の動きで注目されるのは、江の川中流にあつた川本の小笠原氏を救援するため、尼子氏は川本からはるか下流の江川水系出口の河上松山城を攻め、なおかつその敗戦直後に、温泉津まで引き揚げて在陣していることである。つまり、石見東部沿岸の港湾部を軍事的に制圧しながら江の川水系(石見奥地)へと影響力を及ぼしていくという、經久時代と同様の戦略をとろうとしているのである。

しかし、それは、既に必ずしも効果的な戦略ではありえなかつたであらう。

少し後のことになるが、天正三(一五七五)年、薩摩の島津家久一行が薩摩への帰路、出雲から石見に入った際、薩摩・大隅の商人が活動していたのは銀山・温泉津・浜田などであり、それ以东では姿を見せなかつたこと。温泉津、ついで逗留地浜田から出港した家久一行は平戸に立ち寄り南蛮船を見物して薩摩へと向かつていること(23)。それに、当時の東アジア大陸規模での銀需要の状況からしても、銀山の開採以降の銀の主要な流れ、それはこの当時に即していえば主要な経済の動きが、銀山付近を起点に薩摩商人のような遠隔地商人らの活動によって顕著に西向きになつていたことを想定しなければならぬ。このように考えれば、その少し前の時期に、毛利氏が、江の川河口部から西側の小石見浜田を領有する福屋氏といちはやく提携し、瀬摩郡沿岸方面・銀山方面への進出を窺つたことには重要な意味がある。江の川流域から石見東中部の支配は、この狭小な地域の問題を超えて、

既に、九州から東シナ海方面との結びつきによって規定される段階に立ち至つていたことを想定しなければならないのである(24)。

従つて、この毛利氏の石見進出は、陶氏(大内義長)との手切れによつて、毛利氏が安芸国の山間部領主を脱皮し、防長から北九州を含めた大内領国の継承者となつていこうとする新たな段階に立ち至つたことと不可分の関係を持つて進められたと考えられるのである。

### 第三章 支配領域の変化と地域関係

#### 第一節 石見国那賀郡国人福屋氏の滅亡と市山衆

石見国においても、江の川中流域の市山の船持土豪層Ⅱ市山衆は、かつてこの地域を勢力圏とした邑智郡の国人小笠原氏と那賀郡の国人福屋氏の狭間にあつて、一旦は福屋氏に属した(25)。

市山衆は、福屋氏が毛利氏に反旗を翻し瀬摩郡沿岸の福光湊(毛利氏の城番が守る不言城)への軍事的進出に失敗した直後の永祿四(一五六一)年十二月、福屋氏を離れ毛利氏に属した。福屋氏は福光湊を抜いて銀山外港の温泉津へと進出を試みたと考えられるが、これに失敗するや一気に滅亡へと向かう。翌永祿五年二月に、毛利勢は、福屋勢が守る河上松山城を攻撃してこれを陥落させる。その際、市山衆は江の川に船橋を架けて、松山城の裏山へ進軍する毛利勢に合力した(永祿五年)正月九日「毛利元就書状」『岩国藩中諸家古文書纂』(祖式嘉蔵)。このことから、市山衆が船持ち土豪で、江の川水上交通に携わる者であることがわかる。また、彼らの帰趨が、江の川水上交通を制する重要な要素であつたこともわかる。

河上松山城陥落によつて、福屋氏当主福屋隆兼は、本城の本明城を

棄て、浜田の細腰から海路出雲国杵築へ脱出して潜伏することになった(年月日未詳「二宮俊実覚書」『吉川家文書』別集、年末詳九月四日「吉川元春書状案」『岩国藩中諸家古文書纂』森脇久大夫)。ここにも、江の川水系から石見沿岸部、特に邇摩郡沿岸の福光から温泉津方面への繋がりが、那賀郡・邑智郡支配のうえで戦略的に重要な意味を持ったことを知ることができる。

また、この戦いの帰趨を事実上決した市山衆の性格をうかがい知ることが出来るものとして、市山衆の一人井下氏の所領構成は興味深い。井下氏は、福屋氏滅亡後、吉川氏支配の時代の天正年間に至って以下のような所領構成をとるに至っている。

吉川元春袖判奉行入連署打渡状写(『岩国藩中諸家古文書纂』井下孫左衛門)

打渡(元春袖判)

- 一、田六町壹反 奥山大
- 一、田貳町三反 久佐河井垣内
- 一、田貳町七反 日和板屋名
- 一、田七反半 阿刀宮ヶ原
- 小石見
- 一、湊大登い 付田三反畠三反屋敷七ツ
- 一、田二町四反 市山居屋敷分
- 一、畠三町六反半 同 居屋敷分
- 市山 日和

一、三谷山 道平山

以上

右、田帳之儀、今度火事ニ付而失却之御理遂披露被成御分別候条、調進之候、仍如件、

天正拾年十一月十四日

左馬助

因幡守

井下左馬丞 殿

本貫地市山の屋敷分の田畠を中核に、比較的近隣の日和・阿刀とその周辺の田や山、やや離れた久佐・奥山に所領を散在的に所有している。そして何よりも、江の川河口からさらに西の有力な沿岸港湾である小石見浜田にも屋敷を多数所有するなど、遠隔地交通の結節点でもある沿岸港湾部にも経営拠点を持っている(26)。これらのことから、井下氏は、一郡から二郡程度の活動範囲を持つ船持ちの商人的な土豪層であったことが知られる。彼らのような村落上層民で地域経済の担い手たちの志向性が、那賀郡国人領主福屋氏が天文二十三年以降、毛利氏と提携して江の川水系河口部から沿岸部にかけて進出していくという運動方向を規定していたと考えられる(27)。しかし、国人領主福屋氏は、結局この運動に失敗して淘汰された。

井下氏が経営拠点を持つ小石見浜田湊は、前章でも述べたとおり天正年間には遠隔地交通の寄港地で要港であった。それは、天正五年にこの地に立ち寄り逗留した島津家久一行が海路平戸經由で薩摩へ帰ったことや、銀山・温泉津・浜田に進出していた薩摩商人の動きで明らか

かである(28)。

ここに、水陸交通路に位置した地域の土豪層による一・二郡レベルの経済活動範囲Ⅱ小地域経済圏が遠隔地交通の結節点たる主要港湾へと結びつくことよって、国人領はもとより大名の領国を超え、九州を経て東シナ海にも繋がる東アジア規模の広域経済圏の影響をうけることになるのであろう。

そこに、日本海西部から東シナ海海域に向かって石見銀山の銀が急流することによって引き起こされた広域経済構造の変化と、それに牽引されて変容する中小地域経済の姿を想定しなければならないのである。

## 第二節 尼子氏の領国支配衰退と地域関係

### ― 杵築坪内氏の商業圏と尼子氏末期の政治領域 ―

出雲国杵築の商人坪内氏は、少なくとも天文初年頃には尼子経久が杵築大社前町杵築において、十六軒の「室」あるいは「壇所」といういわゆるのちの御師宿に独占的営業権を与えたもののひとつである(29)。この坪内氏は、後に備後の他に少なくとも出雲国内の三沢郷、石見、安芸など出雲国内から近隣諸国にわたる活動範囲を持っている(30)。

坪内氏の性格は、同家文書の翻刻分析を交えた岸田裕之氏の研究に詳細である。それによれば、杵築大社の御師として大社信仰圏の檀那の参詣宿・祈祷などの機能を果たし、この師壇関係により政治外交機能を媒介した。また商人司として地域における商人間紛争の調停者として登場し、地域商業活動の秩序維持機能を果たす一方、尼子氏と被

官関係を結んで軍役衆として立ち働くなど多様な性格を持った。特に、尼子氏の備後北部地域における勢力圏拡大に伴い、坪内氏が三吉氏や江田氏・田総氏など備後北部領主層との間に関係を持ち、布教・商業・政治等一体の活動を展開していた。岸田氏は、彼らのこのような多様な性格の政商的な都市有力者が、大名の領国支配の維持にとって、また、彼らの外交政策遂行にとって不可欠の存在であったことを明らかにしている(31)。

このような性格を踏まえながら、尼子氏衰退期の銀山と杵築との物資需給関係をみると、以下のような政治領域と経済活動領域との矛盾を抽出することができる。

### 牛尾久清書状写(坪内家文書)

島津屋開所就被仰付候、御印判之旨、少も不可有相違候、自然相紛儀候者、可任御法度之旨候、以上馬三疋分可有御通候、恐々謹言、

永禄四年

牛尾太郎左衛門尉

十月五日

久清(花押影)

坪内孫次郎殿まい

### 尼子氏黒印状(坪内家文書)

(黒印)

此馬疋石州罷通候、如御法度米・酒・噲・鉄被作留候、其外肴絹布已下者不苦候、自然寄事左右押妨之族、堅可有停止者也、為其被成袖御判候、恐々謹言、

(永禄五カ)

二月五日

真鍋

豊信(花押)

立原

幸隆(花押)

彦六 殿

これらは、尼子氏が石見支配からほとんど後退し、これに代わって毛利氏の石見支配が確立しつつあった永禄四年末〜五年始め頃の状況と考えられる。尼子氏重臣や奉行人らが、坪内氏に対して、出雲国と石見国境の島津屋関を通行する馬匹の極端な制限と許可、石見への搬出物資の制限を命じたものである。敵地石見へは、軍需物資への転用ができる米・鉄や食料として保存が利く酒・噌などは搬出禁止であり、逆に、都市的需要がある贅沢品で高い利潤が見込める絹布、保存がきかない肴などは規制対象外となっている。これら日用物資の需給関係からは、出雲西部と石見東部との国境を超えた日常的な地域的一体性が見えてくる。

一方、このような需給をめぐる往来にたいして領国支配権力から厳しい規制が入られるというところに、政治的支配の領域的枠組みと商業活動における地域的枠組みとの間に齟齬が生じていることがわかるのである。

しかし、これもそもそも、地域商人と尼子権力との結びつきによる地域商人の活動の拡がり、尼子領国・毛利領国間の領域的拡大・縮小という境界変化の中で生じた齟齬であった。

そのような動きが、坪内氏のような地域有力商人の活動領域を規定

してきたのであろう。

例えば、次に見える史料はそのことを示唆する。

温泉英永・彦二久長連署書状(坪内家文書)

尚々諸祈念之儀、余人にハ申付間敷候、此外不申候、

爰元籠城之事、祈念頼候之処、御懇之至候、本望此事候、於帰国者、於石州温泉津せんさきや又衛門屋敷一ヶ所進之候、永代可有進退候、将又英永知行之内御供無残、是又不可有相違候、恐々謹言、

温泉英永(花押)

十二月廿三日

彦二久長(花押)

石田二郎右衛門尉 殿 参

温泉英永寄進状(坪内家文書)

大社

奉寄進

常灯

右意趣者、息災延命武運長久、別者、至石州滞国、温泉津串山并銀山款冬山、任其外邇摩郡石見悉存分所々令知行成就、如(件脱カ)、

永禄八年五月廿八日

信濃守英永(花押)

いずれも、永禄五年に尼子氏が石見国東部から出雲に撤退した後の永禄六年から同九年の間の文書である。尼子氏の撤退以前に邇摩郡温泉津付近を領した温泉氏が、撤退に伴って出雲国へ入り、尼子氏が毛

利氏に追いつめられ籠城していた富田城から坪内一族に対して出したものである(32)。いずれも神願祈念の依頼や御供を内容としていることから、温泉氏は御師坪内氏の檀那であったとみられる。

前の文書では温泉英永は、坪内氏に対し温泉津にあった長門国仙崎の「せんざき屋」の屋敷を寄付することを約している。また後の文書では、石見国への帰参のうえは温泉津の串山城や銀山の「ふき山」などの知行回復を祈念したりしているなど、かつての温泉氏の領主支配の概要を物語っている。

御師坪内氏は、尼子氏との被官関係、杵築大社に対する国境を超えた信仰を背景に、尼子氏の石見撤退以前から石見東部邇摩郡の領主温泉氏と師壇関係を取り結びながら、当該地域との往来による商業活動を展開してきたと考えられるのである。

しかし、尼子氏が石見東部から軍事的に撤退し、それに伴って政治的領域・境界に変化が生じ流通統制にまで展開した時、需給関係によって結ばれた地域は政治的に分断されてしまい、都市を拠点に大名権力とも結びながら、本国と国境を超えた近隣諸国で活動を伴う地域有力商人にとっては、「自由な」商業活動の桎梏となってしまうのである。そこに、彼らのような立場からは、地域における広域的で、かつ安定的な政治秩序が求められるようになってくると考えられるのである。ここに、大名権力の強力な牽引力による領域支配の広域化を望む主体として、神屋氏のような隔地間商人よりも、坪内氏のような大名権力結合型の都市的・地域有力商人が想定されてくるのである。

このことは、尼子氏の石見からの完全撤退に伴う以下の政治過程からも推測される。

永禄五年六月には、それまで尼子方にあつた赤穴氏が毛利氏に雲石国境の泉山城(佐波)を去り渡して毛利氏に通じた。また、同時期に牛尾久清が波根湖出入りの鰐走城を明け渡し、石見における尼子勢力は一気に撤退する(33)。その直後の永禄五年七月末、毛利勢が本格的な出雲攻めを開始し、飯石郡赤穴から出雲へ侵入し、大津・塩治・今市方面に展開(34)、八月後半には既に出雲西部楯縫郡の鳶巢城まで進出した(永禄五年)八月二十四日毛利隆元書状『萩閥』一六一後藤屋善兵衛)。結局、この年の末までに、赤穴氏(大原郡)、三沢氏(仁多郡)、三刀屋氏(大原郡)、米原氏(出雲郡)、杵築大社(神門郡)、鰐淵寺(楯縫郡)など地域における主な国人・寺社が毛利氏の傘下に入った(35)。

このように、出雲西部は、石見東部が毛利氏の手落ちるやいなや、短時日で毛利方の支配下に入ってしまった。翌永禄六年十月末に島根郡の白鹿城が毛利勢の激しい攻撃により落城して後も天文九年十一月の富田城開城にいたるまでのかなり長期にわたって、少なくとも宍道湖東岸以東の島根郡・意宇郡・能義郡など出雲東部地域が、毛利勢の進出に対して持ちこたえたことと比較すれば、出雲西部地域が尼子領国から脱落するのは極めて速やかであった。

つまり、石見銀山を擁する石見東部・出雲西部地域間の経済活動における不可分な関係と尼子・毛利領国支配の境界との齟齬が、このような展開を招いた主要因と考えられるのである。(36)

むすびにかえて

尼子・大内氏と毛利氏の交代期における石見東部・出雲西部地域や

そこに展開する領主・大名の領域支配が、東アジア地域とその経済的な動きにどう関係し影響されるのかについて地域の内部構造を出発点に考えた。

少なくとも石見銀山が発見されたという大永六（一五二六）年前後、石見銀山がある石見東部は、大内氏の守護国内にありながらも、尼子氏が実質的に領国支配に組み込んでいた。神屋寿禎の交易は、大内・尼子氏が対戦する境界を越えて展開しており、三島氏のような地域商人・山師との結びつきの中で行われていた。この時点では、後のように銀が西に向かって動く以前のこと、尼子氏のこの石見進出は、銀山や銀の動きとは直接関係しなかったと考えられる。

しかし、大内氏滅亡期とその直後、弘治から永禄初年頃のごく限られた期間においても、石見東部に再進出する以上のことをなしえなかった尼子晴久が義久も含めて東アジアとの結びつきを、領国支配のビジョンとしてどれほど能動的に組み込み得ていたのかは不明である。

ただ、実態として短期間ではあるが石見東部の主要港湾の支配を通じて、尼子領国が東アジアの広域経済との接点を持ったことは事実であろう。さらに、尼子末期の永禄四年頃には、出雲西部の要港宇竜に唐船が着岸していることも、そのような接点を持っていた証左であろう。しかし、永禄五年に石見東部を撤退し、直後に出雲西部をも毛利氏によってあっさり奪われてしまった尼子氏が、東アジア経済との接点を領国経営の要件として考え、重視していたのかどうかは疑問である。むしろ、これを重視し能動的に取り入れた毛利氏によって淘汰されたと考えるのが妥当ではないか。

また一方、大内義隆自刃直後の毛利氏が、大内領国の枠内にあって

江の川水系の地域秩序の調停者として腐心する時点で、自らの領域支配と東アジアとの関係を直接意識したとは考えにくい。天文二十三年に陶氏と手切れし翌年の厳島合戦の勝利を経る中で大内領国継承者としての自らを認識して、東アジアとの関係を意識し、石見銀山を擁する石見国侵攻へと動いたと考えるのが妥当ではないか。

しかし、出雲西部・石見東部地域の経済活動に目を転じると、天文二十（一五五一）年の大内義隆の自刃直後には、尼子氏の被官でもあった杵築商人坪内氏がすでに石見銀山に経営拠点を保持しており、杵築から大内領国下の石見銀山にかけて商業活動を行っていた可能性が高いことは指摘したとおりである。また、少なくとも尼子氏が石見東部支配を展開した弘治から永禄初年頃には、坪内氏は石見東部沿岸温泉津・湯里付近の領主温泉氏と師壇関係を結んで、この地域で商業活動を展開していた可能性が高い。このように、出雲西部の港湾都市杵築と石見東部地域とは経済的に結びつき、一体感をもっていたにちがいないのである。

しかし、坪内氏のような地域商人は、特定の大名と保護被保護関係を結びながら、当該大名の領域支配の拡大に伴って活動する半面、領域境界の後退・変化によって領域支配の境界を越えて活動を展開しなければならぬ場合もありえた。これは、経済活動領域と政治的領域支配との矛盾であり、これが当該大名・領主権力後退・倒壊をもたらす可能性を内在させた。尼子氏が石見東部支配から完全撤退した永禄五年六月、毛利氏が矢継ぎ早に出雲西部へ侵入し、同年末までには出雲西部を尼子領国から奪い取ったことからこの矛盾が理解できる。

また、永禄四年、石見国人福屋氏の傘下を離れ毛利氏に従った船持土

豪市山衆の場合も、福屋氏の領域支配が彼らの活動を保護するものとなりえなくなった時点で、速やかに寝返りをうっていることからこの矛盾を裏付けている。

その市山衆のひとり井下氏の場合、本貫地があった江の川中流域市山付近から石見沿岸部最大級の港湾であった小石見浜田に所領や有力な経営拠点を所有しており、石見山間部から河川交通・沿岸交通を通じて、沿岸港湾部と結びついていたことが知られる。『中書家久公御上京日記』からは、この沿岸部小石見浜田や温泉津など主要港には、大隅・薩摩商人ら隔地間商人が進出しており、浜田から出港する船舶が、南蛮船が着岸する平戸を経由して薩摩にまで繋がっていることを知ることができる。このように、石見内陸部へと繋がる交通体系と遠隔交通から、地域が東アジアへとつながるメカニズムを読み取ることができる。

従って、杵築を擁する出雲西部と銀山・温泉津を擁する石見東部沿岸部との商業活動を通じた結びつきは、まずは銀山と周辺港湾都市の繁栄に伴う都市型物資の需給関係において密接な関係にあり、さらに温泉津など主要港湾とそこに進出した隔地間商人を通じて、東アジアとの結びつきに影響され規定されるものであったことが読み取れるのである。

少なくとも十六世紀前中期、銀山周辺地域としての石見東部・中部から出雲西部における流通経済の担い手の階層性を整理すれば以下のようになるであろう。(1タイプ)市山衆のような在地領主に軍役奉仕しながら発展した者で、村落上層民に出自を持ち、沿岸港湾部へと結びつき一・二郡単位で経済活動領域を持つ農村出自型地域商人。お

そらく出雲田儀の三島氏もこのタイプに近いのではないかと思われる。(2タイプ)坪内氏のように、地方の拠点都市に基盤を置き、当該地域の大名権力に軍役奉仕しながら、本国と近隣諸国・諸地域一・二カ国単位で経済活動領域を持つ地方拠点都市型地域商人。(3タイプ)神屋氏のような、国際貿易港に拠点を置き、数カ国をまたがり政治的境界を超えて活動し、貿易にも活躍する都市型隔地間商人。十六世紀後半期の薩摩・大隅商人については、出自の階層性、大名との政治的關係においてさらなる吟味が必要であり、南九州ならではの地理的位置・社会構造の特徴に根ざした性格を持っているであろうことを考慮しなければならぬ。ただ、ごく大まかに述べるのが許されるなら、在郷に出自し、出身国の大名との政治的關係をながしか持ち、数カ国をまたがり政治的境界を超えて活動する、(1・2・3)タイプのおのの性格を部分的に掛け持ちした、いわば地方出自型の隔地間商人であったとみられる。

以上から、石見銀山と周辺農村、沿岸港湾都市を含む石見中東部から出雲西部地域の経済活動と領国支配・領主的支配をめぐっては以下のように言えると思う。

(1タイプ)(2タイプ)の人々が流通経済を直接担って地域経済を支えるとともに、領主権力・大名権力にも奉仕して、それらの領地的支配の一郭を支える存在であった。彼らは、坪内氏が石見に搬出した物資などに見えるように、隔地間商人の往来や、銀山の開発による銀山本体や沿岸都市の発展に伴い生じる諸需要に応える役割を果たしたと考えられる。これに、(3タイプ)や薩摩・大隅商人のような隔地間商人らが沿岸港湾・銀山など地方都市において地域と結節し、銀

を東アジア世界の流通経路に乗せる役割を果たし、彼らが東アジアを含む広範な経済的影響を地域にもたらしていたと考えられる。如上のように次元を異にした役割区分によって地域の経済活動が展開したであろう。

このように、当該地域史においては、人々が普通に生活をし、日常的な生業を営むミクロな地域に対して、東アジアにおけるマクロな地域・海域の国際的変動がどのようなメカニズムにおいて関係しうるのかを構造的に明らかにする視点が必要であろうと思う。

以上のような地域社会構造の中であって、尼子氏は、永禄四・五年、毛利氏に駆逐され石見東部を撤退する過程で、出雲西部から石見東部への物流に規制をかけてしまった。これは、両地域の経済的関係の一体性を損ない、(1・2タイプ)の人々の利益を損なうことであった。その直後、毛利氏によって尼子氏領国から出雲西部が速やかに奪取されたのは、出雲西部が石見東部・銀山とその周辺地域にとつて需給関係において不可欠な、いわば国境を越えて一体性を持った地域であったためであると考えられるのである。

こうして、尼子氏は毛利氏によって出雲西部から駆逐され、出雲東部・伯耆西部方面へと追いやられてしまったのである。

注

(1) 長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館2000年、第一編第三章「尼子氏による他国への侵攻」。

(2) 長谷川氏は「戦国期西国の大名権力と東アジア」『日本史研究』519・2005年の中で、十六世紀の東アジアの経済変動が、中近

世移行期の政治的統合や社会変動の要因になったが、その中における地域権力の位置づけについては、なお検討すべき課題が残されているとする。そして、戦国期の変動と統合を推し進めた原動力は、東アジアの変動が日本銀を起爆剤にしてさらに拡大したことに依っているとする。

また、「十六世紀における西日本海域の構造転換」『日本海域歴史大系5 中世編』清文堂、二〇〇五年においては、石見をはじめ西日本海沿岸部の港湾の発達と、東西水上交通の活発化、これによる東アジアとの結びつきと、これに規定された港湾都市の変化を述べる。

(3) 『策彦入明記』天文十年七月三日条。

(4) 井上寛司「周防大内氏の石見国邇摩郡分郡知行」『南北朝遺文月報2』1989年、同『温泉津町史』

(5) 『大日本古文書』家分け第二十二。

(6) 『新修島根県史』資料編1、一九六七年所収。以下、日御碕神社文書は島根県教育委員会所蔵写真版およびこれに依る。

(7) この文書の題箋には当時將軍職にあつた義晴の名があるが、花押は義植のものである。義植については、『尊卑分脈』大永三年の項では「於阿州撫養四月九日薨給云々、数年後風聞」とあり、大永元年十二月に將軍職を廢されて、同三年四月九日に下向先の阿波国で没していたようであるので、この流浪の元將軍の袖判をめぐる経緯は不明。

(8) 『新修島根県史 史料編一』一九六七年。および、島根県立図書館架蔵影写本に依る。

(9) 藤岡大拙「出雲大社の御師」『茶道雑誌』三九一一、河原書店、一九七五年。のち、同『島根地方史論攷』ぎょうせい、一九八七

年に再録。

(10) 岸田裕之「大名領国下における杵築相物親方坪内氏の性格と動向」『大社町史研究紀要』4、一九八九年、のちに『大名領国の経済構造』岩波書店、二〇〇一年に再録。

(11) 原慶三「尼子氏の石見国進出をめぐって―石見銀山、吉川・小笠原氏との関係を中心に―」『山陰史談』二九号、二〇〇〇年でも同様の見解が示される。

(12) 天文十二年十月二十六日福屋正兼書状『三宮岡本家文書』、この文書は、福屋氏当主から奉行人井頭内蔵助にあてて「小石見大工太郎四郎扶持之儀申候、長沢三反田今度検地候て四反辻遣候其由可申聞候」と書き送っているもの。この頃から、小石見郷大工職への扶持や安堵は、当該地域の国人領主である福屋氏が行っており、郷大工職を国人の被官化している。

(13) 前掲(11) 論文。

(14) 拙稿「戦国期石見国における在地領支配と地域経済秩序―(益田氏庶流) 福屋氏の発展・滅亡過程を中心に―」『ヒストリア』一三五号、一九九二年)

(15) 注(14) 拙稿。

(16) 天文二十三年正月説と同年十一月説があるが、原慶三氏注(1) 1) 論文の指摘や、天文二十四年二月頃から頻出するに出雲西部地域の所領寄進・再編の動き、鰐淵寺・清水寺法席相論などの動きから十一月説をとりたい。

(17) 天文二十四年二月二十八日尼子晴久寄進状(日御碕神社文書)では日御碕神社に対し出雲国神門郡藪村百貫、同日尼子晴久寄進状(出

雲大社文書)では杵築大社に対し神門郡高浜郷之内本家分百五拾貫ほか、同日尼子晴久寄進状(揖夜神社文書)では意宇郡の揖夜神社へ出東郡氷室庄百貫など。

(18) 『新修島根県史 資料編1』一九六七年。および、島根県立図書館架蔵影写本に依る。

(19) 注(18)に同じ。

(20) 『広島県史古代中世資料編』IV。

(21) 『島根県中近世城館調査報告書 石見編』島根県教育委員会、一九九七年。

(22) 『出雲国意宇六社文書』島根県教育委員会、一九七四年。

(23) 『中書家久公御上京日記』。

(24) 原慶三氏は注(11) 論文中において、尼子氏が銀山支配にそれほど興味を示していなかったのではないかと指摘している。毛利氏に比べて尼子氏が銀山の確保にあまり熱心でなかったのも、尼子領国の立地と関係しているのではないかと想定される。つまり、東アジア経済との結びつきを、毛利氏ほどに領国支配を成り立たせる基本的な要件として強く意識しなかったのではないかと推測する。

(25) 前掲注(14) 拙論。

(26) 史料中の「大とい」については、筆者が旧稿で「大土居」と解釈したが、長谷川博史氏は前掲注(2) 『日本海域歴史大系5 中世編』掲載論文において、「大問」との解釈を示している。

(27) 前掲注(14) 拙論。

(28) 『中書家久御上京日記』。

(29) 前掲注(9) 藤岡論文。

(30) 備後国(天文一七年七月吉日「三吉致高寄進状」、年未詳七月一六日「粟屋隆信書状」、年未詳「三吉隆亮書状」、年未詳三月九日・同三月廿六日「福永重久書状」いずれも『坪内家文書』)、出雲国三沢本郷(天文一五年九月廿六日「秋上重孝他十一名 連署状」『坪内家文書』)、安芸国(年未詳十月廿六日「其高慶書状」『坪内家文書』)、石見銀山(年未詳十月十日「尼子晴久書状」『坪内家文書』)がある。

(31) 岸田裕之「大名領国下における杵築相物親方坪内氏の性格と動向」『大社町史研究紀要』4、一九八九年、のちに『大名領国の経済構造』岩波書店、二〇〇一年に再録。

(32) 『温泉津町誌 上巻』温泉津町、一九九四年。

(33) (永禄五年)六月二十三日毛利元就・同隆元連署書状写『萩関』遺漏4-1川尻 浦斎藤源左衛門、永禄五年六月十二日毛利元就・同隆元連署安堵状『萩関』37中川与 右衛門。

(34) 『毛利元就卿伝』マツノ書店、一九八四年、四一四〜四一八頁。

(35) 米原正義『出雲尼子一族』新人物往来社一九八九年。

(36) このように考えれば、かつて矢田俊文氏が「中世水運と物資流通システム」『日本史研究』四四八、一九九九年で指摘したように、尼子氏末期頃の島根半島西部宇竜付近を境にした東西ふたつの日本海経済圏の在り方が理解されてくる。

(島根県古代文化センター専門研究員)



【地図1】16世紀尼子領国・周辺略地図